

ノーベル賞の国際政治学

——ノーベル文学賞と日本、三島由紀夫をめぐる推薦と 選考 1963～1968年——

吉 武 信 彦

International Politics of the Nobel Prize: The Nobel Prize in Literature and Japan, the Nomination and Selection of Yukio Mishima 1963-1968

YOSHITAKE Nobuhiko

要 旨

本稿は、ノーベル文学賞に推薦されていた日本人候補者、三島由紀夫に焦点を当て、その推薦と選考の状況を考察する。三島は第二次世界大戦後の日本の文壇において若手作家の有望株として注目を集め、1963年から1968年までの間、ノーベル文学賞に5回推薦されていた。誰がいかなる理由により三島を同賞に推薦していたのであろうか。また、同賞を選考するスウェーデン・アカデミーにおける三島の評価はいかなるものであったのであろうか。スウェーデン・アカデミーが日本人作家を候補者として本格的に取り上げ始めたとき、三島の作品はスウェーデン側にいかに映っていたのであろうか。

キーワード：三島由紀夫、川端康成、ノーベル文学賞、スウェーデン・アカデミー、ドナルド・キーン

Summary

This paper looks at the nomination and selection of Yukio Mishima, a Japanese candidate for the Nobel Prize in Literature. Mishima was famous for a promising young writer in Japan after the World War II and he was nominated five times during the period from 1963 to 1968. The

author wonders who and for what reason nominated Mishima a candidate for the Nobel Prize in Literature, and how he was evaluated by the Swedish Academy responsible for choosing the Nobel Laureates in Literature. How did the Swedish Academy view Mishima's works when they started adopting a serious stance on nomination of Japanese writers?

Keywords: Yukio Mishima, Yasunari Kawabata, the Nobel Prize in Literature, the Swedish Academy, Donald Keene

はじめに

1 三島由紀夫の推薦状況

(1) 全般的状況

(2) 1963年

(3) 1964年、1965年、1967年

(4) 1968年

2 三島由紀夫に対するスウェーデン・アカデミーの評価

(1) 全般的状況

(2) 1963年

(3) 1964年

(4) 1965年

(5) 1967年

(6) 1968年

おわりに

はじめに

本稿は、川端康成がノーベル文学賞を受賞する1968年までの時期に同賞に推薦されていた日本人候補者、三島由紀夫（1925～1970年）に焦点を当て、その推薦と選考の状況を考察するものである。

1958年以来、川端康成以外に谷崎潤一郎、西脇順三郎、三島由紀夫がノーベル文学賞候補者としてたびたび推薦されていた。同賞の選考母体であるスウェーデン・アカデミーがいかなる判断の下に川端を選出したのかを考えるためには、他の日本人候補者に対する評価も同時に検討する必要があると考え、筆者はこれまで谷崎潤一郎と西脇順三郎に関する推薦と選考の状況を考察した¹⁾。谷崎は、死去した1965年までに、1958年、1960年から1965年までの各年の計7回ノーベル文学賞に推薦されていた。また、西脇は1958年、1960年から1968年までの各年の計10回推薦されていた。

本稿で焦点を当てる三島は、後述するように1963年に初めてノーベル文学賞に候補者として推薦され、その後、1964年、1965年、1967年、1968年の計5回推薦された。スウェーデン・アカデミーは、他の日本人候補者との比較の中で三島をいかに位置づけていたのであろうか。

本稿は、1968年までの三島をめぐる推薦と選考の状況を主にスウェーデン・アカデミーに焦点を当てて考察する。しかし、谷崎、西脇に比べると、三島に関してスウェーデン・アカデミーの資料はかなり乏しいのが現実である。推薦、選考などの文書は、ノーベル財団の規程で50年間の守秘義務があり、50年を過ぎると公開される。しかし、スウェーデン・アカデミー内のすべての作業が文書として記録されているわけではない。たとえば、アカデミー会員の参加するノーベル賞選考の会議について議事録が作成されるわけではなく、会員から候補者が推薦される場合も口頭でなされることが多い。こうした制約はあるものの、日本側の資料とも突き合わせ、現時点で明らかになっている点を本稿では整理したい。

1950年代末以来、日本人がノーベル文学賞に推薦され、候補者となっていることは、日本の新聞でニュースとして度々取り上げられていた²⁾。単なる憶測や不正確な記事もあったが、後の検証で正しいことが確認された報道もある。たとえば、三島については1965年に候補者になっていることが報道され、最終候補者にもなっているとされた³⁾。この年、三島は実際に候補者になっていたが、最終候補者ではなかった。1966年にも三島が候補者になっているとの報道があったが⁴⁾、この年に三島は推薦されていなかったため、これは完全な誤報である。1967年にも三島が最有力候補者4名に入っているとの報道があった⁵⁾。同年は、三島は有力候補者にはなっていたものの、最終の4名には入っていなかった。

以上の例に示されるように、不正確な情報がまぎれてはいたが、三島がノーベル文学賞の候補者となっていることは同時代的に知られていた。三島本人も、友人の日本文学研究者、ドナルド・キーンからこうした情報を耳にしており⁶⁾、ノーベル文学賞受賞への期待を膨らませることになったと考えられる。

三島自身は、日本人のノーベル文学賞受賞に向けて、1958年と1961年にそれぞれ谷崎と川端を推薦する推薦状を書いた経験がある⁷⁾。彼も徐々にノーベル文学賞の存在を自身の問題として意識するようになったとしても、おかしくはない。

こうした経緯から、三島研究ではノーベル文学賞に言及したものも出てきた。三島の評伝において、ノーベル文学賞とのかかわりは避けて通れないトピックであろう。本稿と重なるスウェーデン・アカデミーの資料を利用して詳細な分析を試みた研究もある。三島の文壇での人間関係、さらに日米関係をも視野に入れて、三島が受賞できなかった背景を考察している⁸⁾。本稿では、スウェーデン・アカデミー側の選考プロセスに焦点を当て、スウェーデン・アカデミー会員が他の日本人候補者との比較で三島をいかに評価していたのかを考えたい。

本稿の第1章でまず誰がいかなる理由により三島をノーベル文学賞に推薦していたかを整理する。第2章では、ノーベル文学賞の選考を担うスウェーデン・アカデミーにおいて三島がいかなる評価を受けたのかを検討する。

1 三島由紀夫の推薦状況

(1) 全般的状況

表1に見られるように、1958年から1968年までの期間にノーベル文学賞候補者として推薦されていた日本人4名のうち、三島は最も遅く1963年に初めて推薦され、その後1964年、1965年、1967年、1968年にも推薦された。推薦回数は合計5回となり、4名の中では最も少ない。推薦の回数は、選考の指標とはいえ、多いと有利になるということは基本的にない。早々に否定的評価が確定し、それを覆すことができずに推薦だけが続く場合もある。無論、長く推薦され続けることで、その期間に新しい作品あるいは作品の翻訳が増加し、旺盛な執筆活動をアカデミー会員にアピールできる機会が増えることはあるかもしれない。

表2は、1958年から1968年の選考状況を示した表を以前の拙稿から再録したものである。スウェーデン・アカデミーにおける選考では、アカデミー内のノーベル委員会が推薦された候補者の中から数名の有力候補者を選び出し、その他の会員はその有力候補者の作品を夏の期間を通じて読み込むことになる。これに並行して、ノーベル委員会は有力候補者をさらに絞り込み、上位3名程度に順位付けを行い、アカデミーの全体会議に提案する。このアカデミーの会議が最終的に投票で授賞者を決定する。

表2を見ると、三島は初めて推薦された1963年、さらに1967年にも有力候補者になっている。有力候補者に選ばれた回数は、谷崎が2回、川端が3回である。三島も谷崎、川端と並び、スウェーデン・アカデミーで注目された日本人であったことがわかる。

三島の推薦状況を見てみよう。5回の推薦は、表3の通りである。1963年は、ラーデル・米イェール大学教授、1964年、1965年、1967年はスウェーデン・アカデミー会員の詩人、マッティン

表1 ノーベル文学賞日本人候補者の推薦状況 (1958～1968年)

選考年	日本人候補者 註1			
1958	谷崎潤一郎	西脇順三郎	—	—
1959	—	—	—	—
1960	谷崎潤一郎	西脇順三郎	—	—
1961	谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	—
1962	谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	—
1963	谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫
1964	谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫
1965	谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫
1966		西脇順三郎	川端康成	—
1967		西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫
1968		西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫

註1 「—」は推薦なし。空欄は死去に伴い、ノーベル賞受賞資格がないことを示す。

出所 ノーベル財団ノミネーション・データベース<<https://nobelprize.org/nomination/archive/>> およびスウェーデン・アカデミー資料に基づき、筆者作成。

表2 ノーベル文学賞日本人候補者の選考状況（1958～1968年）

選考年	日本人候補者	候補者 総数	ノーベル委員会ショート・リスト 候補者の選出状況 註1	受賞者（出身国）
1958	谷崎潤一郎	41	無	Boris Pasternak（ソ連） 辞退
	西脇順三郎		無	
1959	無	55	無	Salvatore Quasimodo（イタリア）
1960	谷崎潤一郎	58	6名に残るが、委員長案最終候補者3名には入らず	Saint-John Perse（フランス）
	西脇順三郎		無	
1961	谷崎潤一郎	56	無	Ivo Andrić（ユーゴスラヴィア）
	西脇順三郎		無	
	川端康成		無	
1962	谷崎潤一郎	66	無	John Steinbeck（アメリカ）
	西脇順三郎		無	
	川端康成		無	
1963	谷崎潤一郎	80	無	Giorgos Seferis（ギリシャ）
	西脇順三郎		無	
	川端康成		無	
	三島由紀夫		6名に残るが、委員長案最終候補者3名には入らず	
1964	谷崎潤一郎	76	6名に残るが、委員長案最終候補者2名には入らず	Jean-Paul Sartre（フランス） 辞退
	西脇順三郎		無	
	川端康成		無	
	三島由紀夫		無	
1965	谷崎潤一郎	90	無	Michail Solochov（ソ連）
	西脇順三郎		無	
	川端康成		無	
	三島由紀夫		無	
1966	西脇順三郎	72	無	S. J. Agnon（イスラエル）、Nelly Sachs（スウェーデン）
川端康成	6名に残り、委員長案最終候補者5名の第1位となる			
1967	西脇順三郎	70	無	Miguel Angel Asturias（グアテマラ）
	川端康成		7名に残り、委員長案最終候補者3名の第2位となる	
	三島由紀夫		7名に残るが、委員長案最終候補者3名には入らず	
1968	西脇順三郎	83	無	川端康成（日本）
	川端康成		4名に残り、委員長案最終候補者3名の第3位となる	
	三島由紀夫		無	

註1 ショートリストとは、スウェーデン・アカデミーのノーベル委員会が関心をもち、絞り込んだ有力候補者リストとする。ノーベル委員会は委員長報告の形で最終的にそのうち数名に順位をつけてアカデミー会員に提案する。委員間で順位付けが割れた際は、委員長案のほかにも他の委員案も併記される。

出所 ノーベル財団ノミネーション・データベース<<https://nobelprize.org/nomination/archive/>>およびスウェーデン・アカデミー資料に基づき、筆者作成。

表3 ノーベル文学賞日本人候補者、三島由紀夫の推薦者一覧（1963～1968年）

選考年	日本人候補者	推薦者	職業・肩書	推薦状日付・差出地
1963	三島由紀夫	ラーデル (Johannes Rahder)	イエール大学教授	1963年1月8日付・New Haven, Connecticut
1964	三島由紀夫	マッティンソン (Harry Martinson)	詩人、スウェーデン・アカデミー会員	無(口頭の提案と考えられる)
1965	三島由紀夫	マッティンソン (Harry Martinson)	詩人、スウェーデン・アカデミー会員	無(口頭の提案と考えられる)
1966	無	無	無	無
1967	三島由紀夫	マッティンソン (Harry Martinson)	詩人、スウェーデン・アカデミー会員	無(口頭の提案と考えられる)
1968	三島由紀夫	オルソン (Karl Henry Olsson)	スウェーデン・アカデミー会員、ノーベル委員会委員	無(口頭の提案と考えられる)

出所 ノーベル財団ノミネーション・データベース<<https://nobelprize.org/nomination/archive/>>およびスウェーデン・アカデミー資料に基づき、筆者作成。

ソン、1968年はスウェーデン・アカデミー会員でストックホルム大学教授でもあるオルソンである。これら5回のうち、1963年選考におけるラーデルの推薦状はスウェーデン・アカデミーにおいて原本を確認できる。他方、スウェーデン・アカデミー会員が推薦した1964年、1965年、1967年、1968年の4回については、推薦状は存在していない。前述の通り、スウェーデン・アカデミー会員であるため、推薦は口頭でなされたと考えられる。そのため、以下の推薦状況の分析では1963年を中心に行うことにする。

(2) 1963年

1963年にノーベル文学賞に推薦された候補者は、80名である。候補者数は年々増加する傾向にあり、1958年の41名と比較すると、ほぼ倍増している。ノーベル文学賞への関心が国際的に徐々に高まっていたことを示している。

1963年における三島の推薦は、ラーデル・米イエール大学教授⁹⁾によるものである。ラーデルの推薦状は、1963年1月8日付け、スウェーデン・アカデミーのノーベル委員会宛、手書き2頁のものである¹⁰⁾。ラーデルは、オランダ出身の研究者であり、サンスクリット語などのアジアの言語研究から日本語、日本文学の研究に入ってきた人物である。ラーデル自身が推薦状の末尾に記した肩書は、「仏教サンスクリット語、チベット語、モンゴル語、日本語・文学のイエール大学教授」となっている。

推薦状の内容を細かく検討しよう。ラーデルは、推薦状の冒頭で貴団体の招請に応じて、三島由紀夫氏をノーベル文学賞候補者に推薦すると述べている。三島の人名の後には括弧書きがついており、ユネスコ日本国内委員会と日本ペンクラブが1957年に東京で出版した日本人作家の人名録の経歴に基づき、本名の平岡公威、1925年生まれ、自宅住所も明記している。「招請に応え

て」という点は、スウェーデン・アカデミーから世界中の関係者、関係団体に配布されるノーベル文学賞候補者の推薦依頼の回章を意味するのか、あるいはノーベル委員会から個人的にラーデルに接触があったかは、不明である。

それに続いて、ラーデルは三島作品の英語版を列挙している。出版社名、出版年、翻訳者などが記されたものもある。挙げられているのは、順番に『金閣寺』、『潮騒』、『仮面の告白』、『近代能楽集』、『真夏の死』である。さらに、1954年に東京で出版された6巻本の日本語の著作集¹¹⁾についても言及している。そのうえで、ラーデルは、「彼〔三島一筆者、以下同様〕は、感覚、感情、気分を分析し、表現するうえで卓越した腕前を発揮してきた。伝統的な日本の態度、主に封建的、仏教的なものの最善の要素を、産業化された環境への近代的、実際の、現実的、積極的適応といかに結びつけるか、彼は理解している」と指摘し、推薦状を結んでいる。

ラーデルは、三島について詳細な文学論を展開していないが、英語で読める主要作品を提示したうえで、三島が日本の伝統的要素を産業化された現代社会に結びつけていることを評価している。

(3) 1964年、1965年、1967年

1964年、1965年、1967年の三島の推薦は、スウェーデン・アカデミー会員の詩人、マッティンソン¹²⁾によるものである。彼は、1949年に同アカデミーの会員になり、三島推薦の時点で60歳代となったところである。旺盛な創作活動により、1974年には彼自身がノーベル文学賞を受賞している。

マッティンソンによる推薦状の原本は、スウェーデン・アカデミーにはない。口頭で三島を推薦したと考えられる。マッティンソンの名前は、スウェーデン・アカデミーが作成した1964年、1965年、1967年各年の候補者リストに推薦者として明記され、記録として残っている¹³⁾。

マッティンソンと日本との関係で特筆すべきこととして、1962年3月に来日し、日本の作家らと懇談する機会をもったことがある。その際、彼は同年に日本人候補者が3名いること（氏名は明らかにせず）、日本の推薦機関が弱体であるため、不利であることを指摘している。また、日本人のノーベル文学賞受賞者を出すためには、権威ある推薦機関を設け、候補者を推薦することを助言している¹⁴⁾。以上のように、マッティンソンは日本の作家らと交流を深めると同時に、ノーベル文学賞の選考についても積極的に発言している。日本人のノーベル文学賞受賞に向けて建設的な提言もあり、彼の来日は日本で注目され、新聞、雑誌にも取り上げられている。

なお、1964年、1965年、1967年の各年の候補者数は、1964年が76名、1965年が90名、1967年が70名となっている。1963年と同様に多くの候補者が推薦されていた。

(4) 1968年

1968年の三島の推薦は、スウェーデン・アカデミー会員のストックホルム大学教授（文学史）、

オルソン¹⁵⁾によるものである。マッティンソンと同様に、推薦した際の文書は残されていない。口頭で三島を推薦したと考えられる。

オルソンと三島、日本との接点は不明である。なお、オルソンは、1961年と1963年に川端を推薦したことが記録に残っている。日本文学に注目していたことは確かであろう。

1968年に推薦された候補者数は、83名である。

以上、三島の推薦状を検討したが、スウェーデン・アカデミーに残されている推薦状がほとんど確認できない中では、十分な分析はできなかった。1963年以降、三島がスウェーデン・アカデミー会員を中心に頻繁に推薦され、選考を行うスウェーデン・アカデミー内に支持者がいたことを考えると、三島が有力な候補者として注目されていたことは伝わってくる。

これを可能にしたのは、三島作品が多く翻訳され、実際に読まれていたことが大きいであろう。三島作品の翻訳について、以前に筆者が調査した結果を再録すると、川端がノーベル賞をもらう1968年までに英語、ドイツ語、フランス語、スウェーデン語の4カ国語に絞っても翻訳点数は24件ある。内訳は、英語訳11点、ドイツ語訳6点、スウェーデン語訳4点、フランス語訳3点である。また、1968年までに翻訳された単行本の種類も多く、10冊にのぼる（言語の順番は出版年順）¹⁶⁾。

『潮騒』（英語、ドイツ語、スウェーデン語）

『近代能楽集』（英語、ドイツ語、スウェーデン語）

『仮面の告白』（英語、ドイツ語）

『夜の向日葵』（英語）

『金閣寺』（英語、ドイツ語、フランス語、スウェーデン語）

『宴のあと』（英語、フランス語、ドイツ語）

『午後の曳航』（英語、スウェーデン語、フランス語）

『真夏の死』（英語）

『サド侯爵夫人』（英語）

『禁色』（英語）

スウェーデン語版は、出版年順に『金閣寺』（1962年）、『近代能楽集』（1963年）、『潮騒』（1965年）、『午後の曳航』（1967年）である。どれも英語版からの重訳であるが、『潮騒』以外の3冊は、英語版の出版後、比較的短期間のうちに出版されている。1968年までの川端作品のスウェーデン語版が、『雪国』（1957年）、『千羽鶴』（1966年）、『古都』（1968年）であったことを考慮すると¹⁷⁾、スウェーデンで三島への注目度は高かったことがわかる。

三島は、1950年代から1960年代にかけて精力的に執筆活動を続けており、日本の文壇で注目されていた。これと並行するように、外国人研究者らによって三島作品が次々に外国語に翻訳された。海外においても、まさに同時代的に注目されたのである。これは、他の日本人候補者、谷

崎、西脇、川端にはない三島の強みであろう。

2 三島由紀夫に対するスウェーデン・アカデミーの評価

(1) 全般的状況

スウェーデン・アカデミーにおける選考の流れは、これまで紹介した谷崎潤一郎、西脇順三郎のときと変わらない。スウェーデン・アカデミー会員から互選で選ばれた5名程度のノーベル委員会とスウェーデン・アカデミーの全体会議との間で相互に協議をしつつ選考が進み、最終的にスウェーデン・アカデミーの全体会議で授賞者が決定される。

具体的には、毎年1月末で推薦状の受け付けを締め切った後、スウェーデン・アカデミーのノーベル委員会を中心に候補者と推薦者の確認が行われ、全体リストが作成される。それを受けて、絞り込みが始まる。その際に、必要に応じて候補者に関する関連資料が収集され、専門家から意見の聴取が行われることもある。5月頃にノーベル委員会によって絞り込まれた数人の有力候補者については、スウェーデン・アカデミー会員全員に対して名前が発表され、夏の期間を通じて作品をじっくり読み込む機会が与えられる。また、並行してノーベル委員会は候補者についてさらに絞り込みと順位付けを行う。夏休み後の9月以降のスウェーデン・アカデミーの会議は、ノーベル委員会の詳細な報告書をたたき台に議論を行い、最終的に授賞者を決定するのである。毎年、8カ月ほどの時間をかけて選考が行われるのである。

三島は、スウェーデン・アカデミーにおけるこの選考プロセスにおいて、いかに評価されたのであろうか。主にノーベル委員会報告書、専門家報告書に基づいて、その流れを追ってみよう。

(2) 1963年

1963年の選考には、80名の候補者が推薦された。その中には三島のほか、日本の谷崎、西脇、川端も含まれる。川端が受賞した1968年まで頻繁に登場する日本人候補者4名がこの年に出揃ったことになる。

初めてノーベル文学賞候補者として推薦された三島は、1963年9月19日決定のノーベル委員会報告書¹⁸⁾において絞り込まれた6名の有力候補者の一人に選ばれている。さらに絞り込まれ、順位付けされた最終候補者3名には入らなかったものの、三島が選考の終盤まで注目されていたことは確かである。

この年のノーベル委員会報告書では、エステリング委員長が三島について評価を記している。以下、その該当箇所である。

より詳しい検討の結果、はっきりと思うのは、日本人、三島由紀夫に関する問題でアカデミーが専門家の助言に従い、提案を保留にすべきことである。今回、英訳された彼の最新の

作品『宴のあと』は、彼の技術面の才能を物語るものであるが、東京の日刊紙から借りたモチーフにはある種のジャーナリスティックな手法が見られ、彼の創作に決定的な価値をもたらすものではない。しかし、三島の継続的な成長には注意を払うべきである。というも彼は日本人候補者の中で成功する可能性が最も高いように思われるからである¹⁹⁾。

このように、ノーベル委員会のエステリング委員長は、三島の将来性を高く買う評価を下しているが、現状では専門家の助言に従って様子を見ることを提案していた。英訳が出たばかりの『宴のあと』も参考にされているが、そのジャーナリスティックな手法への評価は高くない。

なお、エステリング委員長は、「専門家の助言」を参考にしているが、これは、ノーベル委員会に提出された2つの報告書を指していると考えられる。コロンビア大学のキーン教授とスタンフォード大学のサイデンステッカー教授の報告書である。

まず、キーン教授の報告書「川端康成、三島由紀夫、西脇順三郎、谷崎潤一郎（1963年）」は、1963年3月15日付けのノーベル委員会事務局長宛書簡を抜粋したもの（英文2頁）である²⁰⁾。キーンは、この中で谷崎、川端、三島、西脇の4名の候補者について紹介と比較を行っている。谷崎をノーベル文学賞候補者として最も高く評価し、川端についても作品の質、人気の点から同様に高く評価しているのに対して、西脇については極めて否定的な見方をしていた。

三島に対しては、キーンは「恐らく現在日本で活動している最高の作家」と位置づけ、特に欧米で戯曲が上演され、小説が翻訳されて評判を得ている事実に触れている。そのうえで、「まだ40歳未満であり、恐らく小説家、劇作家として成長するであろう」と指摘し、若手世代の作家として有望であることを強調している。ノーベル賞に関しては、三島がもらい、谷崎、川端がもらわないと、日本人は大変奇妙に感じるとも述べている。また、三島は今回駄目でも将来再び候補者になるチャンスがあるのに対して、谷崎、川端は三島や他の日本人に賞が授与されると、高齢であり、恐らく次のチャンスがないと指摘し、年齢的な面でも三島よりも谷崎、川端を推している。

もう1つの報告書は、サイデンステッカー教授による1963年4月のものであり、英文7頁にわたるものである²¹⁾。これは、三島に特化し、三島作品をかなり詳細に紹介している。全体的なトーンとしては、三島の才能を評価するが、まだ成熟の域に達していないと見るものである。

サイデンステッカーは、才能がありすぎて、本来可能であった偉大さまで到達できない作家もいることを指摘し、三島もそうなりかねないことを恐れる声もあるとしている。三島がまだ38歳であり、今後も数百の作品を出していくことはまず断っている。しかし、これまでの100にもなろうとする作品から見て、10年前に「日本で最も有望な若手小説家」といわれたままの状況に依然としてあることを問題視する。完全に満足のいく大作を書くという約束が果たされていないとしている²²⁾。

こうした指摘のうえで、代表作の『金閣寺』と『潮騒』を紹介し、その後、これらよりも前の

作品から順番に取り上げている。実際に『仮面の告白』、『愛の渇き』、『禁色』、『秘楽』、『宴のあと』、『獣の戯れ』、『美しい星』、『近代能楽集』、『鹿鳴館』などを取り上げている。『宴のあと』に関しては、プライバシーをめぐる裁判沙汰になったことも触れている。最後に、サイデンステッカーは「三島の才能を否定することはできない」としたうえで、これまでの三島の作品についての判断として、「手放しの熱狂を可能にするほどにはまだ我々は出会っていないが、他方、手放しの熱狂の日がやがて来るかもしれないという希望を可能にするほどには出会っているに違いない」としている²³⁾。

以上のように、サイデンステッカーは、三島に対して才能を高く評価するが、まだ十分にそれを活かしきれていないという厳しい評価をしていたのである。スウェーデン・アカデミーの会員がこれを読めば、三島の38歳という年齢を考えて、今後の創作活動に期待を寄せたのは自然なことであろう。

(3) 1964年

1964年の選考には、76名の候補者が推薦された。日本人は、前年と同じく谷崎、西脇、川端、三島の4名であった。この年は、谷崎が有力候補者6名に絞り込まれた段階までは残っていたが、ノーベル委員会の最終候補者2名には入れなかった²⁴⁾。授賞者にはフランスの哲学者、作家のサルトルである（サルトルは賞を辞退）。

1964年9月17日付けで決定されたノーベル委員会報告書によれば、三島はわずか2行の説明があるだけである。すなわち、「47. 三島由紀夫。専門家の助言に従い、この日本の提案も将来に回されるべきである」と述べられている²⁵⁾。これに見られるように、1964年の選考では三島は高く評価されることはなかった。

1964年のノーベル委員会報告書でも、「専門家の助言に従い」と言及されているが、これには1963年の2本の専門家報告書に加えて、新たに提出されたハーバード大学のヒベット教授の専門家報告書も含まれる。これは、「川端康成、三島由紀夫、西脇順三郎、谷崎潤一郎（1964年）」というものである²⁶⁾。この報告書は、スウェーデン・アカデミーからの1964年4月15日付け依頼に対する回答であるが、時間の制約がある中で手短かに4名の日本人候補者についてまとめている。

三島について、ヒベットは、「多作で才能のある作家ではあるが、有力候補とは言い難い」と述べる一方、最高の小説として『仮面の告白』、『金閣寺』を推し、文体の洗練さのみならず、物語と描写の力、心理的洞察力も挙げている。しかし、まだ成長途中にあるとみている²⁷⁾。ヒベットとしては、存命の日本人作家の中でノーベル文学賞に値するのは、川端と谷崎としており、その作風を改めてこの報告書で簡単にまとめている。

三島に対するヒベットの見方は、基本的に前述のキーン、サイデンステッカーの見方と一致していた。そのため、スウェーデン・アカデミーは今後の三島の活動を注視するとの対応を続ける

ことになった。

(4) 1965年

1965年の選考には、90名の候補者が推薦された。日本からは、前年と同じく谷崎、西脇、川端、三島の4名が推薦された。1965年9月9日付けで決定されたノーベル委員会報告書によれば、4人とも有力候補者7名には選ばれなかった²⁸⁾。同年の授賞者は、ノーベル委員会が第1位に推したショーロホフ（ソ連）がそのままに選ばれている。

ノーベル委員会報告書における三島の評価は、わずか2行の簡単なものであった。すなわち、同報告書は「53. 三島由紀夫。ローンストレーム博士の調査に留意し、この日本人候補者は将来に先送りすべきであると思われる」と記している²⁹⁾。ここに言及されるローンストレーム博士の調査とは、当時日本に滞在していたスウェーデン人、ローンストレームが1965年8月8日付けで日本人候補者4名（谷崎、西脇、川端、三島）についてまとめた報告書である³⁰⁾。スウェーデン・アカデミーはこれまでも専門家に報告書を依頼していたが、アメリカ人を中心とする日本文学研究者によるものであった。この報告書の新しい点は、4名の候補者についてスウェーデン人に日本で調査させ、多様な日本人の見解と日本の状況を報告させた点である。谷崎は1965年7月30日に亡くなっていたが、調査がそれ以前に行われたため、谷崎も候補者として報告書に登場している。

多くのインタビューにおいて頻繁に登場する候補者は谷崎、川端であり、三島、西脇については言及が少ない。三島と西脇について、ローンストレームは調査の早い段階で日本人から見て賞に該当しないことを明確に悟るのである。「三島の比較的若いこと、作品の質の不十分さ（さらに個人的な破壊行為〔詳しい説明はない〕）から真剣にとらえない日本人もいる」と指摘している。インタビューの記録では、三島を興味深い存在とした発言もわずかながら取り上げ、さらに若者が三島を肯定的に見ていることも紹介している³¹⁾。

ローンストレームの最終的な結論は、以下の4点である。(1) 数年来、日本人作家へのノーベル賞が強く望まれていること、(2) 川端と谷崎のみが真剣に検討しうること、(3) 川端と谷崎のどちらが最もふさわしいかは、個人の好みで異なること、(4) 川端と谷崎の両方に授与することが日本にとって「極めて幸福な解決策」になることである³²⁾。この報告書がスウェーデン・アカデミーに提出された時点ですでに谷崎が亡くなっていた状況を考慮すると、川端への授賞を方向づけるターニング・ポイントになった報告書と考えることができよう。

このローンストレームの報告書は、三島にとっては厳しいものであった。キーン、サイデンステッカー、ヒベットの専門家報告書により固まってきた三島評価が、さらに日本人の間でも広く共有されていたことが確認されたのである。スウェーデン・アカデミーは、三島よりも谷崎、川端がノーベル文学賞には望ましいと認識することになったと考えられる。

(5) 1967年

三島は1966年には推薦されなかった。この年に推薦されたのは、西脇と川端のみであった。次に三島が推薦されたのは、1967年である。この年の選考には、70名の候補者が推薦されており、日本人は西脇、川端、三島の3名であった。1967年9月14日付けで決定されたノーベル委員会報告書によれば、3名のうち川端と三島がノーベル委員会の有力候補者7名に入った。ノーベル委員会委員の意見が割れ、最終的には3つの案が出たが、どの案にも川端の名前は入っていた。エステリング委員長の案では川端は3名中の第2位となっているが、三島は最終的な順位付けまではいかなかった³³⁾。

では、三島はノーベル委員会報告書でいかに評価されていたのであろうか。エステリング委員長は、川端への評価に続いて三島について以下のように言及している。

彼〔川端康成〕よりも若い同僚の三島由紀夫は、とりわけ西洋的な衝動やスタイル把握を受け入れる点で明らかにより多才な名手である。英訳で『海との恩寵から落ちた船乗り〔午後の曳航〕』という三島の最新作は、港町で絶望した少年グループにより冷血にも殺された日本の航海士についての物語である。それは一種のジッド風の自由な行動についての問いであり、華々しいが説明不要の感情の冷たさで表現されている。三島の幾分多才な才能は無論新しい仕事で成熟するであろうが、今日の状況では年上の川端を無条件に優先する³⁴⁾。

以上のように、ノーベル委員会のエステリング委員長は、三島を「より多才な名手」と評価し、彼の新作『午後の曳航』にも興味を示している。しかし、三島が今後さらに成熟できるとして将来性に期待を寄せつつも、現時点ではノーベル文学賞候補者として川端を推していたのである。その結果、エステリング委員長はこの年の順位付けで3名を挙げたが、川端を第2位に推したのである。三島は入っていなかった。他の委員も順位づけで違いはあるものの、川端を最終候補者の一人として挙げ、三島を推すことはなかった。すなわち、ヨンソン、オルソン、リンデグレンの3委員は4名を挙げ、第3位に川端を入れている。ギーロウ委員は、順位付けをせずにヨンソンらと同じ候補者4名を挙げたのである³⁵⁾。

1967年の授賞者は、グアテマラの作家、アストウリアスが選ばれている。アストウリアスはエステリング委員長以外の4名の委員が挙げていた候補者である。

(6) 1968年

1968年は、川端がノーベル文学賞で初の日本人受賞者となった年である。この年の選考には、83名の候補者がいた。そのうち、日本人候補者は前年と同様に西脇、川端、三島の3名であった。1968年9月12日付けで決定されたノーベル委員会報告書によれば、日本人では川端のみが4名の最終候補者に選ばれている。この4名の順位付けでノーベル委員会委員の意見は、2つに割れ

ている。第1位をフランスのマルローとする案とベケットとする案である。両者とも、第2位以下は同じで、第3位に川端が入っている³⁶⁾。

三島について、ノーベル委員会報告書は3行で説明している。それによれば、「49. 三島由紀夫。何度も議論されたこの提案は、直接否決されることなく徐々に後退した。彼の継続的な成長は再検討につながるかもしれない」となっている³⁷⁾。1963年の初推薦以来、三島の才能には注目が集まり、三島は有力な候補者として検討されることもあった。しかし、谷崎、さらに川端の前では2番手に位置付けられたのである。ただし、三島の将来性が高く買われていたことは、「彼の継続的な成長は再検討につながるかもしれない」との表現に表れている。川端に続く次の有力候補者であったことは確かであろう。

おわりに

以上、ノーベル文学賞候補者、三島の推薦状況、選考状況をスウェーデン・アカデミーの資料に基づいて考察した。

三島は、1963年、1964年、1965年、1967年、1968年の5回推薦され、このうち1963年、1967年については有力候補者になっていた。その際、1965年の谷崎潤一郎の死去が大きな節目になり、1965年までは谷崎と三島に注目が集まり、1965年以後は川端と三島に注目が移ることになった。三島は1965年以前の時期とその後の時期の両方に登場し、有力候補者の一人として検討されていたことがわかる。しかし、スウェーデン・アカデミーの選考においては、谷崎と川端の存在が大きく、若手の三島が文壇の重鎮である二人を追い抜き、選考でトップに立つことはなかった。三島が日本人として2番手の候補者で終わったことは、本稿のノーベル委員会報告書の分析でも明らかである。

スウェーデンで三島の才能は高く評価され、その作品にも注目が集まっていた。発表された新作がスウェーデン語に次々に翻訳されていた。英語版などの他の言語への翻訳も豊富で、それらも含めれば、三島の創作活動の旺盛さ、水準の高さはスウェーデン・アカデミー会員にも十分伝わっていたことであろう。

しかし、三島がノーベル文学賞をもらうことはなかった。それを理解するためには、特に1963年のキーンの報告書、サイデンステッカーの報告書、1964年のヒベットの報告書、1965年のローンストレームの報告書が参考になる。キーンは、1963年の時点で谷崎、さらに川端を推し、若い三島がもし受賞すれば、日本人の間に奇妙な印象を与えることを指摘していた。また、サイデンステッカーの報告書では、三島の才能を高く評価する一方、多くの作品を出しつつも、まだ偉大さというレベルまで到達したとは言えないと指摘する。成長途上にある若手という印象をスウェーデン・アカデミーに与えることになった。ヒベットもキーン、サイデンステッカーと同様の考えであった。こうした見方を決定づけたのが、1965年のローンストレームの報告書で

ある。スウェーデン・アカデミーがスウェーデン人の専門家に調査を依頼し、日本人の率直な感想を幅広い層から聴取した結果である。同報告書は、文壇の存在感から谷崎、川端の二人が別格であり、どちらかは好みの問題であり、ローンストレーム自身は両者がノーベル文学賞をもらうことを提案していた。谷崎、川端に比べると、三島の位置づけが日本人の間で高くないことがスウェーデン・アカデミー内で共有されたのである。

これらの報告書の存在を考えると、ノーベル委員会、さらにスウェーデン・アカデミーの会議が三島を評価しつつも将来の候補者と位置づけたのは順当な結論であったのであろう。

1963年の専門家報告書を書いたキーンは、三島とも交流が深い日本文学研究者であった。その自伝において1960年代後半、三島がノーベル文学賞をもらうことを確信し、川端の受賞に驚いたことが記されている³⁸⁾。三島の文学的才能と実績を間近で知れば知るほど、そうした思いを強くしたと考えられ、スウェーデン・アカデミーの三島理解とは徐々にかけ離れていったのであろう。しかし、スウェーデン・アカデミーの理解の一端が自らの報告書にあることを考えれば、皮肉なめぐりあわせである。

スウェーデン・アカデミーがノーベル文学賞に値する作家をいかなる基準から評価し、選出するのか。これは答えのない問題である。そのことを三島の事例は教えてくれる。日本人初の受賞者選びという特別な重みがあったとはいえ、この問題はその後のノーベル文学賞の選考でも同じであろう。

(よしたけ のぶひこ・高崎経済大学地域政策学部教授)

註

- 1) 拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、谷崎潤一郎をめぐる推薦と選考 1958～1965年——」『地域政策研究』(高崎経済大学)第22巻第4号、2020年3月。同「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、西脇順三郎をめぐる推薦と選考 1958～1968年——」『地域政策研究』(高崎経済大学)第24巻第4号、2022年3月。
- 2) 拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、1958～1967年の日本人候補に関する基礎的研究(1)——」『地域政策研究』(高崎経済大学)第21巻第3号、2019年2月、9-11頁。
- 3) 「候補に三島氏 ノーベル文学賞」『読売新聞』1965年9月25日朝刊。「三島氏、有力候補に ノーベル文学賞」『朝日新聞』1965年9月25日夕刊。「三島由紀夫氏が有力候補に ノーベル文学賞」『毎日新聞』1965年9月25日夕刊。「三島氏は若過ぎる?ノーベル文学賞」『朝日新聞』1965年9月27日夕刊。「最終候補に三島氏も 文学賞は今夜発表か」『朝日新聞』1965年10月15日朝刊。
- 4) 「谷崎、川端、三島氏らが有力 『ノーベル文学賞』20日に発表」『毎日新聞』1966年10月17日夕刊。「三島氏らも候補 20日発表 ノーベル文学賞」『読売新聞』1966年10月17日夕刊。
- 5) 「三島由紀夫氏としても候補 ノーベル文学賞」『毎日新聞』1967年10月2日朝刊。「三島由紀夫氏が候補に?ノーベル文学賞」『朝日新聞』1967年10月2日夕刊。「三島由紀夫氏、候補に ノーベル文学賞」『読売新聞』1967年10月2日夕刊。
- 6) ドナルド・キーン『ドナルド・キーン著作集 第十巻 自叙伝 決定版』(新潮社、2014年)183-185、258-260、267-269頁。
- 7) 前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、谷崎潤一郎をめぐる推薦と選考 1958～1965年——」、37-38頁。拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、1958～1967年の日本人候補に関する基礎的研究(2・完)——」『地域政策研究』(高崎経済大学)第21巻第4号、2019年3月、16頁。
- 8) 井上隆史『暴流の人 三島由紀夫』(平凡社、2020年)、305-309、373-374、442-453頁。
- 9) ラーデル(Johannes Rahder 1898～1988年)は、オランダ人の東洋研究者。父の仕事の関係で、オランダ領東インド(現インドネシア)で生まれた。仏教への関心からサンスクリット語を学び、中国語、日本語などの言語も習得した。その後、オランダのライデン大学(1931～1946年)、アメリカのイェール大学(1947～1965年)で日本語、日文学の教授を務めた。
- 10) Letter from Johannes Rahder to the Nobel Committee of the Swedish Academy, 8 January 1963, Swedish Academy.

- 11) 三島由紀夫『三島由紀夫作品集』全6巻（新潮社、1953-1954年）を指すと考えられる。
- 12) マッティンソン（Harry Edmund Martinson 1904～1978年）は、スウェーデン人作家、詩人。16歳の時に船員となり、10年ほど海外を放浪。20代の終わりに健康上の理由で船員の生活をやめ、作家活動を開始。詩集、散文集などを多数出版。1949年、スウェーデン・アカデミー会員（席番号15）に就任。1974年、ノーベル文学賞を受賞。Bo Svensén, *De Aderton: Svenska Akademiens ledamöter under 225 år* (Stockholm: Svenska Akademien, 2011), s.208.
- 13) マッティンソンは、1964年と1965年には三島のほか、川端、谷崎も推薦している。1967年には三島のみを推薦している。ノーベル財団のノミネーション・データベースを参照した。ノーベル財団ノミネーション・データベース<<https://nobelprize.org/nomination/archive/>>、最終閲覧2022年11月18日。
- 14) 「日本から三作家 ノーベル文学賞候補 マーチンソン選考委員談」『朝日新聞』1962年3月6日朝刊。「日本人作家三人も候補に ノーベル文学賞について語る スウェーデン作家マーチンソン氏」『毎日新聞』1962年3月6日朝刊。「ノーベル文学賞をめぐる 権威ある推薦機関を」『朝日新聞』、1962年3月12日朝刊。
- 15) オルソン（Karl Henry Olsson 1896～1985年）は、詩を中心とした文学史研究者。ウプサラ大学で学び、博士号取得後、国立公文書館、スウェーデン・アカデミーの文書保管課とノーベル図書館で勤務。1945年から1961年までストックホルム大学（Stockholms högskola）文学史（詩）教授。1952年、スウェーデン・アカデミー会員（席番号5）に就任。1960年～1971年、同アカデミーのノーベル委員会委員。Svensén, *op.cit.*, s.98.
- 16) 前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、1958～1967年の日本人候補に関する基礎的研究（2・完）——」、24-26頁。
- 17) 同上、22-24頁。
- 18) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommitté 1963, Svenska Akademien, s.10-11.
- 19) "Yttrande av Herr Österling,"Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommitté 1963, Svenska Akademien, s.11.
- 20) Yasunari Kawabata, Yukio Mishima, Junzaburo Nishiwaki, Junichiro Tanizaki (1963), Swedish Academy.
- 21) Yukio Mishima (1963), Swedish Academy.
- 22) *Ibid.*, p.1.
- 23) *Ibid.*, p.7.
- 24) "Yttrande av Herr Österling,"Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommitté 1964, Svenska Akademien, s.1-3.
- 25) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommitté 1964, Svenska Akademien, s.5.
- 26) Yasunari Kawabata, Yukio Mishima, Junzaburo Nishiwaki, Junichiro Tanizaki (1964), Swedish Academy.
- 27) *Ibid.*, p.1.
- 28) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommitté 1965, Svenska Akademien, s.1, 10-12.
- 29) *Ibid.*, s.5.
- 30) John Rohnström, "P. M.," Tokyo, den 8 augusti 1965, Svenska Akademien.
- 31) *Ibid.*, s.3, 6, 7.
- 32) *Ibid.*, s.7.
- 33) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommitté 1967, Svenska Akademien, s.10-12.
- 34) *Ibid.*, s.11.
- 35) *Ibid.*, s.1.
- 36) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommitté 1968, Svenska Akademien, s. 1, 9-10.
- 37) *Ibid.*, s.5.
- 38) キーン、前掲書、267-269頁。

付記

本年度をもって本学地域政策学部を定年退職される新田浩司先生には、本学部発足以来、長い間、大変お世話になりました。ご指導、ご支援に対して心よりお礼申し上げます。ご研究のますますのご発展とご健勝を祈念いたします。本稿は、2022年度科学研究費補助金（課題番号18K01471）による研究成果の一部である。